

# 地域おこし協力隊 活動報告書

令和2年度（2020.4.1～2021.3.31）

担当：中心市街地活性化

勤務：まちづくり白杵（サーラ・デ・うすき）

協力隊1年目 林 佑太郎

# コンテンツ

## ◆ 担当事業相関図

◆ アクターズズクリニク白杵サテライト (演技養成学校)

◆ コミュニケーションプログラム

◆ 劇団ムジカ旗揚げ公演

◆ まとめ

# 担当事業相関図

- ◆ 地域おこし協力隊 担当業務：中心市街地活性化
- ◆ まちづくり白杵 担当業務：中心市街地活性化（うすき街色事業演劇部門）  
また、サーラ・デ・うすきのスタッフとして管理業務も担当。



まちづくり白杵  
(うすき街色事業演劇部門)



協力隊担当業務



文化芸術による  
中心市街地活性化

# アクトーズクリニック白杵サテライト（俳優養成学校）

レッススタジオ：サーラ・デ・うすき つまみキッチン



アクトーズクリニック代表を務める梶原涼晴隊員（文化芸術振興）が白杵サテライトを創設し、私、林が本校の講師を務める。質の高い白杵産俳優を育て、演劇というアプローチで白杵から世界へ継続的に芸術を発信していくことで文化芸術の振興、そして、白杵のまちと人に活力を与え、中心市街地の活性化を図る。

## ◆ 受講者

2020年1月創設 レギュラー2名/エルダー2名

2021年3月末 レギュラー8名/エルダー2名



## ◆ レッスン風景 エルダークラス



## ◆ 舞台発表会 「TAKEYOI ANOTHER STORY～24年目のうすき竹宵～」



←2020/11/7(日)

@サーラ・デ・うすき

般若姫物語を題材にしたオリジナルの舞台を無観客オンライン公演にて実施。白杵ケーブルネット・うすきチャンネルのご協力のもと、ご家庭で安心して観劇していただける環境を整えた。

オリジナルのショートシーンを実演→レギュラークラスの受講生も参加。

# コミュニケーションプログラム

「演技を通じて、今、できることを。～子ども達に明るい未来を～」

## ◆ 動機

新型コロナによる閉鎖的な日常が子ども達の“心”に悪影響を与えているのでは？

これからの日本を、世界を、担っていく子どもたちの未来のために、芸術で何かできないだろうか？

言葉や表現を通じて子ども達と関わり合える時間をつくりたい！！



## ◆ オンラインによる対応

### ◆ レッスン内容

俳優に必要なスキルが身に付く“シアターゲーム”を活用。言葉あそびや言葉のキャッチボール、身体や想像力を使って自己表現等。月に一回。45分間。

### ◆ 活動実績

オンラインレッスン：海辺こども園、すえひろ児童クラブ。

対面レッスン：福良ヶ丘児童クラブ、市浜児童クラブ。

### ◆ 成果（児童クラブ職員さんの感想）

- ・ 自分の気持ちを話すようになった。
- ・ 表現が変わってきた。
- ・ 元気になった。

### ◆ 子ども達の様子

- ・ 人と関わるのが楽しそう。
- ・ 気分転換になっているように感じる。
- ・ 楽しみにしてくれている。

表現力伸び磨き

アクトークリニック白杵校

新型コロナ

児童クラブにオンラインでレッスン

コロナ禍での実施は気を付けるべき点も多く大変だったが、現在も子ども達と触れ合っている中で思うことは、早めに行動を起こし、動き出せたことは良かったと感じている。引き続き、子ども達のために継続していきたい。

# 劇団ムジカ旗揚げ公演

白杵にちなんだ戯曲や小説、または白杵の歴史や人物をモチーフとしたオリジナル作品を、舞台や朗読劇等によって表現し、白杵の魅力を芸術というアプローチで世界中に発信していく。人材育成、文化芸術振興、歴史資産を活用した活動等による中心市街地活性化に向けた活動を積極的に行う劇団。

## ◆ コロナ禍がもたらした文化芸術活動への打撃

当初の予定では、協力隊着任早々の2020年4月時点で、旗揚げ公演を計画し年内中に実施と考えていたものの、コロナ禍での公演は極めてハイリスクであり、安全性の高いオンラインによる無観客公演も考えたが、劇団ムジカの幕開けとなる旗揚げ公演に限っては、どうしても有観客で行いたく、年内中の**旗揚げ公演は見送りとなった。**



劇団  
ムジカ



MUSIC  
THEATRE

# まとめ

私が協力隊として着任した時には、すでに新型コロナウイルスが世界中に蔓延しており、臼杵にも感染者が出始めていました。コロナは当時、未知数のウイルスであったため、ほぼ全ての行事やイベントは為す術もなく中止。民間による小規模の活動ですら無期限の延期。ここまでの度重なる延期や中止が続く中での文化芸術活動は、私の想像をはるかに超えるほど厳しいものでした。

といいますのも、私が任されている芸術による中心市街地活性化は、コロナ禍以前では、「人と人が触れ合う（密になる）」環境がマストであり、「3密回避」を宣言されてしまったら、ただただ自粛するしかないような状態だったのです。

しかし、そこで活動域を広めてくれたのが、『リモート』。今まで世界中に蔓延っていた「対面じゃないといけない」という風習が一変したため、私の活動もリモートを組み込むことでやっと動き出すことができました。

苦勞した協力隊一年生でしたが、このコロナ禍で嬉しい発見も。それは、『人には人と触れ合える密な環境が必要であり、人はそれを求め続ける。』ということ。これはリモートワークが普及したことで気付けた産物だと思います。今後も中心市街地活性化に取り組む上で、文化芸術の無限の可能性を信じて活動していきたいと思います。

林 佑太郎